（２）中村西中学校　校内適応指導教室の取り組み

中村西中学校長　山本　博一
研究協力員　　倉本　英樹

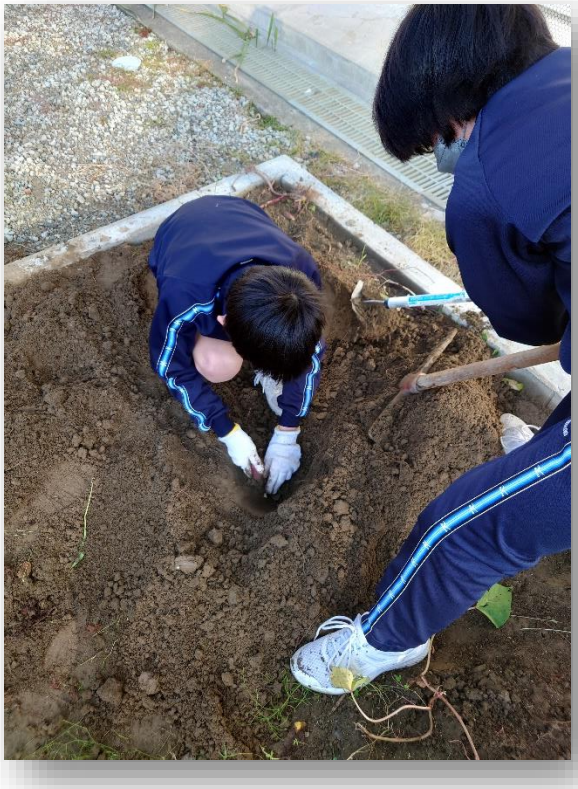
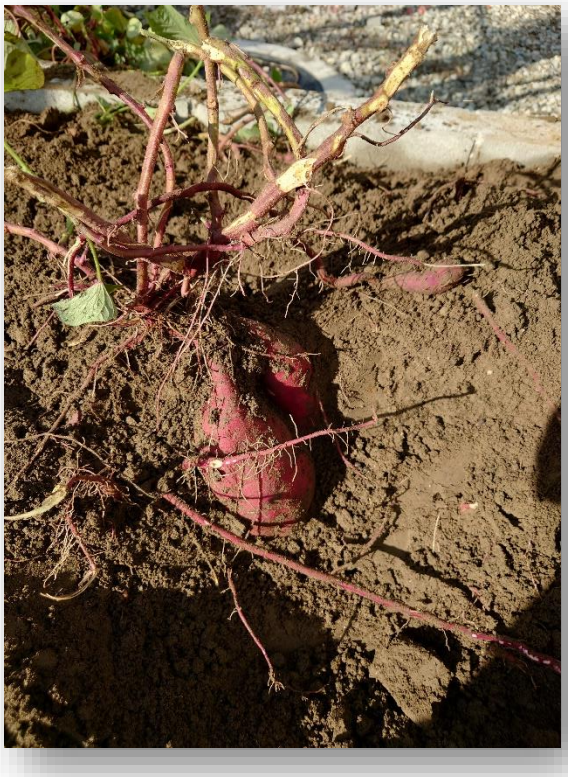
令和４年度の取り組み、分析、成果と課題について

取り組み	【令和４年度の取り組みについて】 ○主に活動している場所が適応教室１で、数名が通級している。その中でも女子２名はパーテーションで区切っている。パーテーションで細かく区切った場所（適応教室２）に３名、保健室に数名と、本人の過ごしやすさやニーズに応えた環境を整えている。適応１では１日４時間の５教科の学習と、適宜技能教科が入り、教科担当教員を配置して、その他適応 Co、支援員、SSW が支援を行っている。保健室で過ごす生徒へは養護教諭が支援を行っている。 また、今年度は新たな取り組みとして、メダカや畑づくりを通し、物づくりや命について考える時間もとり、調理実習も行った。 ○支援センターからは SC に訪問していただき、11 月～12 月には毎週集中プランで５回の SST を行った。また、適応２では本人の希望の活動を取捨選択させて、教科指導をする生徒もいれば楽器を使ったりジグソーパズルをしたり、絵を描いたりしながら活動した。 ○週に１回のミニ支援会や生徒指導部会、月に１回の校内支援会を行い、ミニ支援会は水曜の朝、管理職、学年部長、適応 Co、特支 Co、SSW で行い、校内支援会では管理職、学級担任、適応 Co、特支 Co、SC、SSW と今年度は支援センターから 2～3 名参加してもらい、支援方法を相談して支援に生かしてきた。生徒指導部会は木曜の朝管理職、生徒指導主事、学年生徒指導で１週間のサイクルで行なっている。また、気持ちメーターの推進をして、定着もしてきた。 ○SC は週に１回来校し、特支 Co と共に家庭訪問や個人面談を中心に、適宜ケース会に入り、支援方法を検討、助言し、SSW は週に３～４日配置があり、週の計画を適応 Co と組んで家庭訪問や不登校生徒の支援にあたっている。また関係機関（教育支援センターや児童相談所や家庭児童相談所）とも連携している。 ○現在、不登校、不登校傾向生徒が合わせて 20 名程度となっている。校内適応教室に通級して昨年度より欠席が減っている生徒は８名で、そのうちの２名は学級に入って部活動も行なっている。4 名は適応教室で遅刻、欠席、早退がほとんどなく、学習にも向かうようになり、力もついてきている。3 名は、休んでいたところから出席できるようになってきている。また、毎日適応１に通級している生徒の内３名が総合的な学習の時間や体育、理科等少しずつ学級に入っている。 ○支援センター（ふれあい学級）への通級を促す生徒も数名いる。通級利用者は少ない。1 年生１名が月に 10 日前後、2 年生１名が時々通級している。
分析 検証を ふまえて	**①不登校支援として「どのような取り組みが、どのように影響し成果につながったのか」** ○居場所づくり…居場所ができてからはまず早退がなくなった。次に登校日数が増えた。自分の席があることや、居てもいいという安心感、それによる適応教室での所属感や仲間意識が芽生えたことは一つの成果である。自分の育てた野菜、やメダカの飼育等うまくいったりいかなかったりする命の体験と共に、SST でコミュニケーションの活動をしていると、寡黙な生徒も発言でき、優しさや、言葉の大切さなどの理解に繋がっていると思われる。 ○養護教諭や SC、SSW、担任、適応 Co 等で、2 日休むと家庭訪問、報告、共有、次のプラン等、継続した支援が行えている。ケース会議で家庭訪問の仕方を変えた時、連絡が取れず、家庭訪問に行っても誰にも会えない家庭の母と、つながることができた。まず母の支援に取り組もうとしていると、母から学校へ初めて連絡をくれて、子どもの様子を知らせてくれた。

分析 検証をふまえて	○SC の面談で、心に悩みを抱えている生徒は救われている。ただ、週に 1 日しかチャンスがないので相談を希望する生徒の人数が多くなり、ケース会・家庭訪問・カウンセリングの時間が十分にとりにくくなっている。 **②来年度以降、「どのようにして不登校支援を継続していくのか」** ○教室…適応教室１・適応教室２←これは適応教室３が代わりになる。保健室。 ○適応指導教室コーディネーターがいないので、担当教員は１名つけるが、授業の内容や時間割は教務主任が引き継ぐ。担当教員の仕事はミニ支援会・校内支援会の運営、ケース会議の運営も行う。特支支援員を増やしていただき、そのサポートをしてもらう。 **③「校務支援システム」「きもちメーター」の活用、小中連携について** ○校務支援システム…校内研修で説明会をしたが、定着していない。もともとメモしたり、すぐに学年でまたは学校で共有したりしているので、もう一度それを入力すると二重になることと、開いてみることや入力することで仕事が増える事が理由に挙げられる。 ○きもちメーター…ほぼ定着している。学級によっては、朝の学活に時間のかかる日があり入力していなかったり、声をかけなかったら忘れていたりということは時々あったが、ある学級ではコメントをよく書いてくれる生徒が多くて、その日や前日に家庭であったことや、生徒によっては苦手な教科や活動がある時の気持ちの浮き沈みがよく分かっていいと思った。また、その学級は担任が積極的に関わることで、学活や総合的な学習の時間、担任の授業等に入る生徒が多い。それは所属感や、学級での存在感を生徒が感じているからと思われる。 課題は、時間の確保をどこでするかがポイント。それから担任がクラスのコメントをすぐに見られない時が多くあるのでタイムリーな支援や声掛けができないこと（学級差・個人差）がある。 ○小中連携について 今年度より、統合元年という事で、1 年生だけではなく各学年小中の情報交換や、校内の情報交換を行い、交流学習を通して仲間づくりをしてきた。その結果は下記のように学校や学級について楽しいと思う生徒が 95%を超えているので、具同小学校だけでなく、小規模の学校の生徒にも目を配った活動ができたように思える。 「あなたは学校が楽しいですか」96% 「あなたは学級が楽しいですか」98% 「あなたは授業内容がよく分かりますか」87% しかしながら、年度途中での新規不登校生徒ができてしまい、年度初めよりも増えている。
課題	○校務の関係で担任や学年の適応教室へのアプローチが難しいことがある。タイミングをみて情報共有していかないといけない。 ○ほぼ登校のない不登校生徒への支援方法は定期的な家庭訪問や手紙以外にないか。 ○ゲーム等にのめり込んで顔色が悪い生徒がいる。家庭に困り感がない所が多い。 ○学力や学習意欲に課題がある生徒への新たな支援方法。
成果と課題を踏まえた 来年度の 方向性	○野菜を育てたり、メダカの繁殖を世話したりすることで、命の大切さや、工夫したり努力したら成果が上がることを実感させたい。 ○進路意識や社会性を身に付けさせ（SST）、自分の将来に早く目を向けさせるとともに、進路保障をしていくキャリア教育の推進を図る。 ○児童相談所や家庭児童相談所等、他機関との連携をとり、子どもの背景や置かれている環境をふまえた適切な支援をしていく。 ○担任や学級の生徒が積極的な適応教室へのアプローチをすることで、生徒に所属感や自己存在感を与え、共感的な人間関係を育む。

畝を作り、苗を植えました

メダカも育ちました

夏になり、大きく育ちました

収穫しました